

第4回 ドイツ語作文・翻訳コンテスト

独文和訳 課題

Innenminister Thomas de Maizière (CDU) hat mit einem Zehn-Punkte-Plan für eine deutsche Leitkultur eine von ihm selbst gewünschte Debatte ausgelöst. Sein Text in der „Bild am Sonntag“ stellt bestimmte Höflichkeitsformen, Leistungsdenken, das kulturelle Erbe Deutschlands, die Bedeutung der Religion, Gewaltfreiheit bei der Lösung von Konflikten und einen „aufgeklärten Patriotismus“ mit unverkrampfter Verwendung nationaler Symbole als „Richtschnur“ des Zusammenlebens vor. Die Verwendung des umstrittenen Begriffs „Leitkultur“ verteidigt de Maizière mit dem Argument, das Wort „leiten“ sei etwas anderes als vorschreiben oder verpflichten.

„Wir sagen unseren Namen. Wir geben uns zur Begrüßung die Hand. Wir zeigen unser Gesicht. Wir sind nicht Burka“, heißt es unter anderem in seinem Text. Bildung und Erziehung seien Werte, nicht nur Instrumente zur besseren Vorbereitung auf das Berufsleben. Das Erbe der deutschen Geschichte „mit all ihren Höhen und Tiefen“ bedinge „ein besonderes Verhältnis zum Existenzrecht Israels“. Die Religion solle Kitt, nicht Keil der Gesellschaft sein. „Unser Land ist christlich geprägt.“ Grundlage für den religiösen Frieden sei aber der „unbedingte Vorrang des Rechts über alle religiösen Regeln“.

Quelle: Berliner Zeitung 30.04.2017

<http://www.berliner-zeitung.de/politik/zehn-punkte-plan-de-maizi%C3%A8re-entfacht-hitzige-debatte-ueber-leitkultur-26819218>

特別賞作品 伊藤彩乃様

トーマス・デメジエール内務大臣（キリスト教民主同盟）は、ドイツ主導文化について十か条構想を発表したことで、自身が期待した通りの議論を巻き起こした。『ビルト紙日曜版』に掲載されたデメジエール氏の文章では、決まった挨拶の作法、成果主義、ドイツの文化的遺産、宗教の意義、紛争解決における非暴力主義、国家のシンボルを緊張せずに用いるという「啓蒙された愛国心」を、共同生活の「墨糸（「物事の規準」の意）」として紹介している。議論の最中にある「主導文化（Leitkultur）」という概念の使用をデメジエール氏は擁護しているが、その論拠は「導く（leiten）」という言葉が「指図する」や「義務付ける」とは別物だからだという。「我々は名を名乗る。挨拶のために手を差し出す。顔を見せる。ブルカは使わない。」デメジエール氏の文章には例えばそう書かれている。また、教育としつけは財産であって、職業生活に向

けてしっかり準備するための単なる道具ではないと言っている。ドイツの歴史の遺産は、「良いことも悪いことも全て含め」「イスラエルの存続権への特別な関係」を生み出しているという。そして、宗教は社会の接合剤であるべきで、くさびであってはならないという。「我々の国はキリスト教の影響を受けている。」としながらも、宗教的自由のための基盤は、あらゆる宗教規則を上回る、権利の「絶対的優位」であると謳っている。

講評

春に発表され、賛否両論となった内務大臣トーマス・デメジエールの „Zehn-Punkte-Plan für eine deutsche Leitkultur “ に関する新聞記事から出題しました。

まず問題となるのはLeitkulturの訳ですが、今のところ定訳と言えるものはないようです。しばしば「主導文化」と訳されていますが、日本語としてはいかにもこなれていない印象があります。他の選択肢としては「標準文化」「主流文化」など。また、やや意識になりますが、課題文中の訳としては、「文化規範」としても良かったかもしれません。

掲載作は、テキストの内容を的確に把握し、丁寧に日本語に移しているという点でもっとも優れていました。ただし、「(国家のシンボルを) 緊張せずに用いる→気軽に用いる」「教育としつけ→教養と教育」など、訳文をさらに検討して欲しい箇所がいくつかあったのと、何よりも最後の行に „Frieden “を「自由」、 „Recht(s) “を「権利」(ここでは「法律」が正解)と訳す誤訳があったために、残念ながら最優秀賞受賞には至りませんでした。